

中山間地域における地域住民の「互助」に関する文献検討

Documents examination about the mutual help power of local residents in the semi-mountainous area

伊藤美穂¹⁾, 内田朋子¹⁾, 久保木紀子¹⁾, 小林裕子¹⁾, 横山正博²⁾, 人見英里²⁾, 田中マキ子²⁾

Miho Ito¹⁾, Tomoko Uchida¹⁾, Noriko Kuboki¹⁾, Hiroko Kobayashi¹⁾, Masahiro Yokoyama²⁾, Eri Hitomi²⁾, Makiko Tanaka²⁾

- 1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程
- 2) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

- 1) Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University
- 2) Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

要約

高齢化が進む中山間地域における地域住民の「互助」について文献検討を行った。2000年～2013年に発表された文献を検索した結果17件が該当し、その内容を分析した結果、【中山間地域の現状と課題】【地域づくりの実際】の2項目を抽出した。

中山間地域では、これまで集落単位のコミュニティが形成されてきたが、それらのコミュニティが弱体化し、長期的・手段的サポート資源として成立していないなどの現状と課題が指摘されていた。地域の現状に合った集落活動を展開していくことが望まれ、社会資源の活用なども検討していく必要があることが示唆された。また、ネットワークの形成を促進していくことが住み慣れた地域と住民生活の存続に繋がると思われる。

キーワード：中山間地域、「互助」、高齢化、集落活動、地域づくり

Abstract

We reviewed articles published in 2000-2013 that discussed mutual aid of local residents in the semi-mountainous areas that ageing was in progress. As result seventeen articles was hit. We extracted two items: [current situation and problems, semi-mountainous area] [community design and development]. The following current states and problems pointed out. Communities in semi-mountainous areas have been constructed in unit so far, though today these communities did not have a function as long-term and instrumental support resources. It is desirable to continue to expand community activities that matches the current states of areas, also it is suggested that it is necessary to also consider the use of such social resources. Further it is considered to lead to survival of local residents and life it is dear to continue to facilitate the formation of the network.

Keywords : semi-mountainous area, mutual aid, ageing, community activities

I. 緒言

わが国の高齢化率は、総務省統計局の人口推計平成26年11月1日月報の概算値によると26.0%であり、ますます高齢化が進展していくと予測されている。また、わが国の国土の73%は中山間地域である。中山間地域は、過疎化・少子高齢化の進行、高齢者世帯の

増加、集落機能の低下、集落戸数の減少にともなうコミュニティ機能の低下、産業活動の低迷、社会資源の不足を特徴とする。特に中山間地域の高齢化は、全国よりも早く進行し、高齢者をめぐる様々な問題がさらに顕在化すると予測されることから、今後、住民同士の助け合いなど「互助」の活用が求められている。

厚生労働省は、地域包括ケアシステムの構築において、「自助」、「互助」、「共助」、「公助」の適切な役割分担の必要性を強調している¹⁾。地域包括ケア研究会の定義によれば、「互助」とは「インフォーマルな相互扶助。たとえば、近隣の助け合いやボランティア等」²⁾であるとしている。

このような背景から中山間地域では、「互助」が今後どのように発揮されていけばよいかについて検討が必要となる。この検討を行うための作業として、「互助」に関する文献検討を行った。

II. 研究目的

中山間地域における「互助」について文献検討を行い、高齢化が進む中山間地域における「互助」の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 対象とした文献

社会老年学文献データベース（以下、DiaL）、J-STAGE および CiNii の文献データベースを用いた検索によって文献を収集した。「中山間地域」、「インフォーマル」、「互助」、「地域包括ケア」、「高齢化」、「過疎」を検索ワードとし、2014年10月1日現在で検索した。

DiaL により検索された論文は 125 件、J-STAGE により検索された論文は 795 件および CiNii により検索された論文は 229 件であった。これらの論文のうち、抄録の内容を高齢者支援の専門家とともに検討し、本研究の目的に適合と判断される 17 件を文献検討の対象とした。本研究においては、介護保険制度における「互助」の現状と課題を明らかにすることとし、介護保険制度が施行された 2000 年以降の文献を対象とした。

2. 分析方法

各論文を精読した後、意味内容の類似性に着目して要約したリスト 37 項目を作成した。さらにそれらの要約リストをカテゴリー化する作業を行った。カテゴリー化にあたっては、共同研究者間で繰り返し検討し、信頼性の確保に努めた。

IV. 結果と考察

1. 要約リスト、1次カテゴリーおよび2次カテゴリー
要約リスト 37 項目から、1次カテゴリー 10 項目（＜生活困難＞＜交通手段＞＜生活支援＞＜生活意識＞＜コミュニティ機能＞＜政策的支援＞＜インフォーマルケア＞＜地域との結びつき＞＜地域住民の助け合い＞＜ネットワークの形成＞）、これらの 1次カテゴリー

表 1. 要約リスト、および 1 次カテゴリーと 2 次カテゴリー一覧

文献 No.	要約リスト	1次コード	2次コード
3	働く場がなくなり、日々の買い物や通院に事欠き、田畑や山林の管理、冠婚葬祭も難しい。(2012年)	生活困難	中山間地域の現状と課題
4	生活関連施設整備の遅れが問題である。(2002年)		
3	地域の状況は徐々に変化し、生活を成立させるための機能が失われつつある。(2012年)		
4	日常生活上車が必要であるが、車の運転をしない高齢者には問題が多い。(2002年)	交通手段	
4	日用雑貨の移動販売は、商業施設の補完として大きな意味がある。(2002年)	生活支援	
5	情緒的なサポート資源や短期における手段的サポート資源は、他出子・近隣関係が有効であるが、長期的・手段的サポート資源として成立していない。(2001年)		
3	「ここが一番いい」「ここを離れたくない」という思い。(2012年)	生活意識	
3	年齢が上がるほど、居住期間が長くなるほど定住意識が高い。(2012年)		
6	伝統的に集落を単位としたコミュニティが形成されてきたが、これらのコミュニティが弱体化しつつある。(2006年)	コミュニティ機能	
7	高齢化率の高い集落では、明らかに寄合回数が少ない。(2004年)		
7	壮年人口数が特に少ない集落においては、生産的議題はおろか生活的議題すら、かなり減少している。(2004年)		
8	高齢化の進展と人口減少で自律的な集落活動の展開が容易でない。(2011年)		

9	集落の活動は、自治会活動へと移行してきており、集落活動も含めたコミュニティの活動回数は、自治会設立によって増加している。(2006年)	コミュニティ機能	中山間地域の現状と課題	
9	コミュニティ再編で自治会組織に再編したことにより、コミュニティ活動への住民参加の促進、コミュニティ活動の活発化、コミュニティ内の連携の強化の3点の成果が得られた。(2006年)			
8	政策的に、集落活動を有効にするには、特定の領域や目的を限定するのではなく、多様な集落活動を対象とした政策支援が必要である。(2011年)	政策的支援		
10	家族形態の動向をみると、インフォーマルケアの労働力としての家族を想定することは難しくなり、地域の力を活用したケアが求められる。(2011年)	インフォーマルケア		
3	地域住民自身が集落内において持ちうる力のみではなく、地域住民自身を中心とした集落外の他者との関係によって得られる力、社会資源によって得られる力も合わせて考える必要がある。(2012年)			
11	様々な地域特性を踏まえたインフォーマルケアの基盤となるコミュニティ作りが必要である。(2007年)			
12	インフォーマルケアサービスの提供主体が多様化する中で、これらの地域包括ケアシステムがマネジメントするためには、提供主体別のデータが収集され、これを分析した後にシステムの包含を決定するべきである。(2012年)			
13	「近隣・親戚相互支援」型ネットワーク居住の限界から、公的支援システム拡充が求められる。(2003年)			
7	近隣集落との連携(集落間ネットワーク)の有無やあり方にも大きく左右される。(2004年)	地域との結びつき		地域づくりの実際
8	外部とのつながりを継続することが、住民の地域で暮らす誇りの醸成につながる。(2011年)			
14	近所付き合いや近隣同士の相互扶助が盛ん。(2006年)			
15	共助の役割も兼ねるようになり、地縁的要素と共在の場の持続が考えられる。(2009年)			
16	近隣者同士での見守り体制づくりが必要である。(2009年)	地域住民の助け合い		
17	限られた家族に限らず、人間関係を外に広く試みる必要がある。(2013年)			
3	お茶のみ会の習慣といった住民相互の情緒的サポートと社会的交流の機能は維持されている。(2012年)			
3	サポート提供者の高齢化や転出などに伴って手段的サポートの提供に困難が生じている。(2012年)			
17	家族以外のインフォーマルな支援者とも相互に支え合っているが、サポートの継続性についての問題がある。(2013年)			
3	家族と地域住民が日頃から関係性を保っておくことは重要である。(2012年)			
18	同居家族以外の担い手の有効性も認められている。(2012年)			
16	通い家族自身が地域の支援者として期待できる。(2009年)			
19	住民の中に育ちつつある助け合いによるインフォーマルな支援活動のネットワークが必要である。(2000年)	ネットワークの形成		
8	集落活動は、住民同士のコミュニケーションネットワークを再生し、集落自治を取り戻す意義を有する。(2011年)			
8	中心的な役割を果たしている人物を起点とするインフォーマルな人間関係が形成され、円滑な集落活動が期待される。(2011年)			
15	住民による共助は地域の特性に応じており、現存するコミュニティを有効活用するための支援が重要である。(2009年)			
3	ソーシャルキャピタルを豊かにすることが暮らしやすい地域づくりにつながる。(2012年)			

から、2次カテゴリ【中山間地域の現状と課題】【地域づくりの実際】の2項目を抽出した。「」内は要約内容、〈〉内は1次カテゴリ、【】内は2次カテゴリとした。

要約したリスト、および1次カテゴリと2次カテゴリについて、表1に示した。なお、文献Noは、引用文献の番号と一致している。

2. 中山間地域における「互助」の研究の動向

分析対象となった文献は、2000年～2005年は1～2件ずつであるが、2006年以降は毎年2本以上と増加傾向を示している。厚生労働省が、2007年より「地域社会で支援を求めている者に住民が気づき、住民相互で支援活動を行うなどの地域住民のつながりを再構築し、支え合う体制を実現するための方策」（「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」）を検討した時期および地域包括ケア研究会が、2009年に「自助」、「互助」、「共助」、「公助」の適切な役割分担の必要性を強調した報告書²⁾が提出された時期と一致する。

3. 中山間地域における「互助」について文献検討の結果及び考察

1) 【中山間地域の現状と課題】

中山間地域では、「働く場がなくなり、日々の買い物や通院に事欠き、田畑や山林の管理、冠婚葬祭も難しい。」³⁾「生活関連施設整備の遅れが問題である。」⁴⁾。つまり、「地域の状況は徐々に変化し、生活を成立させるための機能が失われつつある。」³⁾という〈生活困難〉や、「日常生活上自家用車が必要であるが、運転しない高齢者には問題が多い。」⁴⁾という状況から〈交通手段〉に関する問題が指摘されている。このように〈生活困難〉や〈交通手段〉に関する問題を背景に、「日用雑貨の移動販売は、商業施設の補完として大きな意味がある。」⁴⁾という中山間地域特有の〈生活支援〉があることが指摘されている。

一方、「『ここが一番いい』『ここを離れたくない』という思い。」³⁾や「年齢が上がるほど、居住期間が長くなるほど定住意識が高い。」³⁾という地域住民の〈生活意識〉が指摘されている。中山間地域での定住意識はあるが、「情緒的なサポート資源や短期における手段的サポート資源は、他出子・近隣関係が有効であるが、長期的・手段的サポート資源として成立していない。」⁵⁾という〈生活支援〉上における課題も指摘されている。

中山間地域では、「伝統的に集落を単位としたコミュニティが形成されてきたが、これらのコミュニティが弱体化しつつある。」⁶⁾、「高齢化率の高い集落では、明らかに寄合回数が少なく、集落内の壮年人口数が特に少ない集落では、生産的議題はおろか、生活的議題すらかなり減少している。」⁷⁾という現状や、「高齢化の進展と人口減少で自律的な集落活動の展開が容易でない。」⁸⁾という〈コミュニティ機能〉の脆弱化が指摘されている。近年、「集落の活動は、コミュニティ再編によって、自治会活動へと移行してきており、集落活動も含めたコミュニティの活動回数は、自治会設立によって増加している。自治会組織に再編したことにより、コミュニティ活動への住民参加の促進、コミュニティ活動の活発化、コミュニティ内の連携の強化の3点の成果が得られた。」⁹⁾などの〈コミュニティ機能〉を強化した成果も指摘されている。このような現状に対して、「政策的に集落活動を有効にするには、特定の領域や目的を限定するのではなく、多様な集落活動を対象とした政策支援が必要である。」⁸⁾と〈政策的支援〉の必要性が指摘されている。

ところで、集落や地域においては、「家族形態の動向をみると、インフォーマルケアの労働力としての家族を想定することは難しくなり、地域の力を活用したケアが求められる。」¹⁰⁾、「地域住民自身が集落内において持ちうる力のみではなく、地域住民自身を中心に集落外の他者との関係によって得られる力、社会資源によって得られる力も合わせて考える必要がある。」³⁾と指摘されている。これらのことから、「様々な地域特性を踏まえたインフォーマルの基盤となるコミュニティ作りが必要である。」¹¹⁾。今後は家庭や地域などの限られた範囲だけではなく、〈インフォーマルケア〉を活用したコミュニティ形成が必要であることがわかった。しかし、「インフォーマルケアサービスの提供主体が多様化する中で、これらの地域包括ケアシステムがマネジメントするためには、提供主体別のデータが収集され、これを分析した後にシステムの包含を決定すべきである。」¹²⁾と、インフォーマルケアのデータ収集と分析の必要性が指摘されている。さらに、「近隣・親戚相互支援型ネットワーク居住の限界から、公的支援システムの拡充が求められる」¹³⁾という課題が指摘されている。

2) 【地域づくりの実際】

中山間地域は「近隣集落との連携(集落間ネットワーク)の有無やあり方にも大きく左右される。」⁷⁾、「外

部とのつながりを継続することが、住民の地域で暮らす誇りの醸成につながる。」⁸⁾と指摘されている。一方で、地域内では、「近所付き合いや近隣同士の相互扶助が盛ん。」¹⁴⁾であり、「共助の役割も兼ねるようになり、地縁的要素と共在の場の持続が考えられる。」¹⁵⁾ことから、中山間地域では「地域との結びつき」が強いことが示唆された。

このことから、「近隣者同士での見守り体制づくりが必要である。」^{16) 17)}と、地域における「互助」が必要であることが指摘されている。実際に行われている活動としては、「お茶のみ会の習慣といった住民相互の情緒的サポートと社会的交流の機能は維持されている。」³⁾。一方で、「サポート提供者の高齢化や転出などに伴って手段的サポートの提供に困難が生じている。」³⁾ことや、「家族以外のインフォーマルな支援者とも相互に支え合っているが、サポートの継続性についての問題がある。」¹⁷⁾という現状から、「家族と地域住民が日頃から関係性を保っておくことは重要である。」³⁾ということが指摘されている。また、「同居家族以外の担い手の有効性も認められている。」¹⁸⁾ことや、「通い家族自身が地域の支援者として期待できる。」¹⁶⁾ことから、「地域住民の助け合い」が重要である。

「住民の中に育ちつつある助け合いによるインフォーマルな支援活動のネットワークが必要である。」¹⁹⁾ことや、「集落活動は、住民同士のコミュニケーションネットワークを再生し、集落自治を取り戻す意義を有する。」⁸⁾ことから、集落活動が地域における住民同士の「ネットワークの形成」につながる事が考えられる。さらに、集落活動は「中心的な役割を果たしている人物を起点とするインフォーマルな人間関係が形成され、円滑な集落活動が期待される。」⁸⁾ことから、「ネットワークの形成」を促進させるものであると考えられる。また、「住民による共助は地域の特性に応じており、現存するコミュニティを有効活用するための支援が重要である。」¹⁵⁾ことや、「ソーシャルキャピタルを豊かにすることが暮らしやすい地域づくりにつながる。」³⁾ことが指摘されている。

V. 結語

中山間地域では、伝統的に集落単位のコミュニティが形成されていたが、今日そのコミュニティが弱体化しつつある。また、居住期間が長くなるほど定住意識は強くなる一方で、長期的・手段的サポート資源として成立していないなどの課題がある。これらの現状と

課題を踏まえ、新たなコミュニティの再生のために、地域の現状に合った集落活動を展開していくことが望まれている。また、集落内だけでなく、集落外の社会資源などの活用も今後検討していく必要があることが示唆された。このような集落活動を通して、ネットワークの形成を促進していくことが、住み慣れた地域とそこでの住民生活の存続に繋がると思われる。

VI. 今後の課題

集落活動を進めていくうえで、地域外の社会的資源や、関係機関など集落活動を支える様々な要因について検討し、住み慣れた地域とそこでの住民生活の存続について検討する必要がある。

なお、本研究の立案、実施、論文執筆については、伊藤、内田、久保木、小林が同等に貢献した。

引用文献

- 1) 〈地域包括ケア研究会〉地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点、持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2013).
- 2) 平成20年度老人保健健康増進等事業地域包括ケア研究会報告書－今後の検討のための論点整理－、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2009).
- 3) 渡辺裕一：限界集落における高齢期ひとり暮らし時永住希望とコミュニティ・エンパワメントの関連－高齢者の生活を支援する地域住民のパワーとの関連を中心に－、日本保健福祉学会誌, 18(2)：11-20(2012).
- 4) 瀧澤雄三, 山本和恵, 佐藤平：生活関連施設の利用からみた中山間地域居住高齢者の生活圏に関する研究－栃木県安蘇郡葛生町を事例として－、介護福祉学, 9(1)：71-81(2002).
- 5) 山下亜紀子：農村高齢者の福祉サポート資源への期待－青森県黒石市六郷地区の調査分析をもとに－、村落社会研究, 8(1)：47-58(2001).
- 6) 作野広和：中山間地域における地域問題と集落の対応、経済地理学年報, 52(4)：264-282(2006).
- 7) 小田切徳美, 坂本誠：中山間地域集落の動態と現状－山口県における統計的接近－、農林業問題研究, 40(2)：267-277(2004).
- 8) 中村勝則, 高橋加菜子, 佐藤了：集落における共

- 同活動の現代的意義 - 秋田県横手市山内地域における2つの集落事例の比較を通じて - . 農村経済研究, 29(2) : 93-100(2011).
- 9) 上條恵, 広田純一 : コミュニティ再編における市町村の支援のあり方 - 岩手県葛巻町「自治会型コミュニティ組織」を事例として - . 農村計画学会誌, 25 : 11-316 (2006).
 - 10) 立松麻衣子 : 小規模介護施設を利用している在宅要介護高齢者の地域居住を支える「関係性を支えるケア」の方策 . 日本家政学会誌, 62(1) : 23-34(2011).
 - 11) 石川久展, 冷水豊, 山口麻衣 : 一般高年者のソーシャルネットワークと地域特性との関連に関する研究 - ソーシャルネットワークの地域特性別分析の試み - . ルーテル学院研究紀要, 41 : 1-12(2007).
 - 12) 筒井孝子 : 日本の地域包括ケアシステムにおけるサービス提供体制の考え方 - 自助・互助・共助の役割分担と生活支援サービスのありかた - . 季刊社会保障研究, 47(4) : 368-381, (2012).
 - 13) 金貞均 : 高齢者の継続居住を支えるネットワーク居住と集落環境のありかた - 徳島県東祖谷地方の山間集落における調査により - . 日本建築学会大会学術講演梗概集 : 715-716(2003).
 - 14) 高橋信幸, 浜崎裕子・花城暢一ほか : 離島・過疎地域におけるケアリング・コミュニティ形成に関する研究 (その1) - 長崎県西海市崎戸地区におけるインフォーマルサポートの活性化に向けて - . 長崎国際大学論, 6 : 143-152(2006).
 - 15) 西野達也, 桑木真嗣 : 高齢者通所施設利用者の生活からみたある地縁型地域における地域住民らによる共助のみられる共在の場に関する事例考察 . 日本建築学会計画系論文集, 74(642) : 1707-1715 (2009).
 - 16) 米増直美, 松下光子 : 過疎地域に居住する高齢者の「通い家族」の現状と支援のあり方 . 岐阜県立看護大学紀要, 9(2) : 53-59(2009).
 - 17) 畠山明子 : 単身高齢者のインフォーマルな支援の分析視角 . 北星学園大学大学院論集, 4 : 53-64(2013).
 - 18) 藤島法仁 : 在宅一人暮らし高齢者を取り巻く「互助」、共助と生活の質の関連について . 長崎短期大学紀要, 24 : 103-111(2012).
 - 19) 早川富博, 浜田茂彰, 林香月ほか : 中山間部における在宅ケアの現状・課題と方向性 . 日本農村医学会雑誌, 48(5) : 710-719(2000).